様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：５３３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２００３８

研究課題名（和文）フッサール身体論の変遷と転回：「世界」概念との連関を軸として

研究課題名（英文）Husserl's philosophy of the body: Its transformation and transition

研究代表者
鈴木　康文（SUZUKI, Kobun）

石川工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：５０３０２３３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究において、フッサール身体論に関し、中期から後期に至るまでの思想変遷と転回を確認した。
　中期の思想については、いわゆる心身問題を取り上げ、フッサールの取り組みとその限界を明らかにした。またいわゆる自己接触現象を主題として、彼の思想転回を明らかにし、後期に至って、身体固有の機能をその現象から分析したことを示した。さらに、フッサールが身体の運動感覚と時間との関わりをいかに捉えていたかについても考察した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I followed the development of Edmund Husserl's philosophy of the body from his middle to his late analyses.
By examining his "mind-body problem," I clarified Husserl's approach and the limitations of his middle theory of the body. Through detection of the "self-contact phenomenon" (for example, the right hand touching the left), I showed that in his late philosophy, Husserl had clearly stated a function in a lived body through this phenomenon. Moreover, I considered how Husserl had grasped the relationship of "kinesthetic sensation" to time.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学　倫理学　思想史　現象学　身体論

１．研究開始当初の背景

（１）現象学の創始者であるフッサール（1859-1938）は、その後期（1920 年代）において、自らの思想を様々に展開したことで知られている。たとえば時間論に関しては、C 草稿（生き生きした現在）として分類されている遺稿において示されているように、時間の深層への分析を試みている。また相互主観性においても、受動的総合や衝動からの議論がなされている。さらに最晩年に生活世界という新たな概念に基づき、その世界論を展開させている。そのためこのような主題に関してはきわめて多くの研究がなされている。しかしながら、身体機能自身や、その身体によって開示される生きられた空間論、さらに身体自身がその機能を発揮するにあたって前提としている大地の問題は、実はあまり研究の焦点が当たっていない。

（２）その理由のいくつかを指摘すると、まずフッサール自身初期においては身体に関わる空間論を述べた講義録『物と空間』（1907）や、1910 年代中期には身体に関わる諸現象を分析した『イデーン II』があるものの、晩年においてはこの課題を明示的にはとりあげておらず、生活世界論とのかかわりから議論がされたり、相互主観性において議論がなされたりしているにすぎないことがあげられる。

（３）さらにまたその分野に関するフッサールの遺稿がまだ十分に出版されていないことがあげられる。すでに出版されている草稿としては、著名なものに相互主観性論の一部や『危機』書の付録である「幾何学の起源」、あるいはいわゆる「コペルニクス説の転覆」などがあるが、これのみではフッサールの思想の一側面が示されているだけであり、なお十分とは言えない。出版された資料のみを利用するだけでは、事象に即した分析というよりは解釈を重ねた研究となりがちである。もちろん遺稿に基づいた研究は何点かみられるが、1960-90 年代の研究は、現在の時間論や生活世界論の研究蓄積成果を踏まえたものではないため、鋭い指摘は見られるもののなお体系的な分析には至っていないというのが現状である。またこうした遺稿を利用した研究書を、さらに再解釈した議論もみられる。あるいはメルロ＝ポンティのように、自身の研究展開の素材としてフッサールの草稿を利用しているものもある。

２．研究の目的

（１）このような状況にあって当該研究は、フッサールの中期以降、特に晩年の身体に関する思想を、未公開の遺稿を中心に分析して、彼の身体に関する思想変容を明らかにしようする試みである。この作業により、フッサールの身体論の統一像と変遷を見いだすものである。

（２）すでに筆者は、主に初期から中期にかけてのフッサールに関して、彼の身体論の特徴を「キネステーゼ」（運動感覚）概念に求め、知覚現象を中心にキネステーゼとヒュレーとの連関を分析した。また後期の身体機能と世界の関わりの問題にも着手した。その探求においてたとえば「右手で左手を触る」という自己接触現象に関していえば、フッサール自身がその事象分析に基づいて自らの身体論を大きく転回させたことは示し得たが、その転回がいかなる内在的な動機づけによるのか、またどのような問題を明示的に受け取っていたのかは今後の研究課題として残されることとなった。

（３）フッサールが彼の身体論を展開するにあたって、この自己接触現象を、身体固有の現象として分析したことは、すでによく知られている。しかしフッサールは、身体を語るにあたって最初からこの現象の特異性を見いだしたわけではない。なるほど彼はその初期から身体に着目し、その身体によって構成される空間論を論議していた。また 1910 年代の中期においてかなり詳細な身体に関わる事象を分析していた。しかし根幹といってよい身体の自己接触現象をめぐっては、何度も議論を積み重ねながら変遷していったというのが実情である。そしてこの現象の分析に関しては、後期にかけては大きく転回させたといってよい。本研究はこのフッサールの思想の歩みを辿り、身体論に関するこの転回を解明する。この議論はすなわちフッサールの思想の内在的な動機づけ連関を読み解くことであり、またこれにより、彼の身体論の到達点を示すと共に、彼の限界、すなわち彼の身体論において見いだし得なかった方向を示すことにつながる。そしてこの研究により、初期から中期にかけてフッサールがさまざまに規定した「構成される身体（という意味）」の探求ではなく、身体の機能とその機能が遂行される条件としての世界の問題が解明される。

以上の試みは、従来の研究が、自己接触による「可逆性」としてのみ語られることの多かった身体論に対して、領野（と世界）の開示機能としての身体を出発点として議論することになる。ここでいう可逆性とは、身体の自己接触を、触っている手が触られる手となり、逆に触られている手が触っている手となる現象として読み解くことであり、この自己接触現象に可逆性を読み取ることは、それはたとえばメルロ＝ポンティの身体解釈の影響であり、その解釈からの脱却が図られよう。またこれは後期思想の特質を示す「生活世界」の問題を身体論から読み取り、また世界の問題として取り上げられる「大地」や「地盤」といった概念に関して、身体から一定の脈絡をつけることを意味する。これにより自己接触による世界の開示という根源的な身

体機能と、この身体機能の条件である先行する世界の意義に関して新たな捉え直しがなされる。この試みに関しては、フッサールの影響を受けた、メルロ＝ポンティやハイデッガー、あるいは西田の研究をふまえて取り組むこととする。

この探求により身体論に関して基本概念であったキネステーゼや、器官、零点、領野等を、フッサールは再鋳造し直したことが示される。たとえばキネステーゼに関しては、それを文字通り運動感覚として規定するのか、あるいは自己運動の感覚という自己感覚なのか、フッサール研究者においても錯綜しているのであるが、こうした問題についても一定の見通しをつける。こうした諸概念に関しても思想の経緯を探った上で、改めて晩年問われることになった、身体機能が発現する条件としての世界の問題を解明する。これはすなわち両者の相互媒体機能に関して読み解いていく試みである。

この問題はさらにフッサールは、知覚においては身体と純粋自我とを機能面に関する限り同一視していたと解釈されてきただけに、世界の開示という事象のもとで両者の機能を腑分けし、その機能を捉え直すことが肝要となる。その際、近年さらに研究が進んできたフッサールの自我問題（根源的な自我の問題）を見据えて探求する。

３．研究の方法

（１）フッサールの著作集は、現在も刊行中であるが、身体に関わる遺稿（D 草稿）は、部分的には刊行されているものの、まだまとまった形では出版されていない。そのためドイツ・ケルン大学フッサール文庫に出向き、この未公開草稿から資料収集にあたり、その分析作業をした。この収集した資料と、すでに刊行済みの資料に基づいて、フッサールの思想の展開を分析した。

また身体論にとどまらず、後期フッサールの思想の中でも重要な問題である衝動問題をとりあげ、身体と衝動とをフッサールがどのように取り上げたのかを資料にあたって探求した。

（２）また身体に関して、近年の現象学研究は、心理学、認知科学、脳科学といった自然科学の知見を踏まえて、その研究を進めているので、身体と意識に関するこれら諸研究の動向を探究した。さらに意識に関する自然科学の論述に対していかに現象学が現在いかに対峙しているのかを現象学諸研究から洗い出した。

（３）さらに身体を研究テーマとするなかから、現代の応用倫理学が身体をいかに位置づけているのかについても目を配り、身体を介した研究テーマをより視野の広い方向から探るための一助とした。

４．研究成果

（１）まずフッサールの中期（いわゆるイデーン期）において、彼は身体と心の関わりをどのようにとらえていたのかを考察した。これはいわゆる心身問題に該当するのであるが、彼自身はこの問題に直接答えることはしているわけではない。『イデーン』II の論述に従って、実在としての物、身体、心がいかに構成されたのかを考察し、そこからいわゆる心身問題がいかに生じてきたのかを考察した。特に身体が何らかの物に触れている、という事象から、物、身体、および心がいかに構成されるのかを辿り、そこから身体と心との連関を導出することを試みた。

なおフッサールは経験科学を遂行する理論的態度である自然主義的態度のもとで実在性が成立しているとみなしている。この自然主義的態度は、各領域、自然（物的自然、動物的自然）の成立という議論の枠組みをもつ。本研究は、フッサールの記述に倣い、この自然主義的態度のもとでの、質料的自然（物）、動物的自然（身体、および心的実在）という階層の枠組みの基に議論をした。

ただしあくまでも身体がある物に触っているという事象を中心に現象学的な分析を進め、一旦は（物、身体、心といった）領域の階層性からは離れる。その試みから、この枠組みおよびそれをもたらした自然主義的態度の制約を明らかにした。

本研究はそのために実在性を簡単に規定した上で、物の実在性を素描する。次に第二の実在である身体の構成を採り上げる。ただし身体構成については、フッサールは二つの異なる仕方で論議しているので、それぞれを採り上げて、その違いを明示し異なる解釈を導き出す。

また、フッサール研究者でも解釈が分かれている「感覚態」概念をとりあげ、フッサール自身が抱えていると思われる揺らぎを指摘した。次に身体構成の論議を深めるために、フッサールが、身体構成に関してあるアポリアが生じると述べている箇所があるので、その問題を考察し、それが疑似問題とあることを示した。さらにまた自然主義的態度における、二層性は、常識に裏付けられているとはいえ、フッサールはその制約を十分には解明しないままに終わっていることを明らかにした。

以上を踏まえた上で、心と身体との関わりに関して論を深めた。

（２）フッサールが彼の身体論を展開するにあたって、いわゆる自己接触現象を、身体固有の現象として分析したことは、すでによく知られている。ここでいう自己接触現象とは、たとえば右手で左手をさわるといった自分の身体の一部が自分の身体に接触する現象のことであり、物に接触していることとは異なる現象を指す。

しかしフッサールは、身体について最初か

らこの現象の特異性を見いだしたわけではなく、視点を変え変遷していった。本研究ではまず初期から中期にかけてのフッサール身体論を整理して、そこに含まれる諸問題を明示し、それらの問題を後期（特に 1930 年代晩年）にフッサールはどのようにとらえたのかを考察した。

このために当初彼は身体に関してどのように構成されると考えたのか（いわゆる身体の自己構成）を『物講義』を中心にして、さらに『イデーン』II を材料にして分析することにした。そしてそこに含まれる身体論の問題を特に自己接触現象に関わる限りで洗い出してみた。たとえば、『イデーン』II においては、領域存在論における自然、動物、という領域の下に議論されているため、議論が錯綜することとなり、自己接触現象の固有性については見いだすことができない結果に陥っている。

以上をふまえてこの問題に関して最晩年のフッサールがどのような見通しをもっていたのかを考察し、この事象の独自性を明示した。彼はそこでは、触覚における領野の開示にも着目し、身体機能の一つとして、領野の開示機能を示した。そして自己接触における領野の開示において、あらかじめ身体機能の唯一性の気づきが生じていることを示した。

身体が能動的な知覚対象としてその同一性が把握されるいわゆる身体の自己構成による自己身体の統一・統合に先だってあらかじめ機能として気づかれていること、また事象としては受動的総合のもとで語られるものの、感覚相互の総合とは異質の事象であることを明らかにした。自己接触において身体機能の唯一性が覚知され、さらに身体器官の分節がそれに伴ってなされるわけである。

（３）さらにフッサールの身体論の要ともいえるキネステーゼ（運動感覚）を彼の時間論との関連から分析を試みた。

キネステーゼは一方ではその対概念であるヒュレー（感覚与件）との相互制約から議論される。しかしキネステーゼが自己身体に関する運動の感覚であり、まさに運動のもとに問われている以上、時間がその前提となっていることは言うまでもない。

自己身体の運動という時、われわれは特にいちいち反省しながら（あるいはそれを自覚しながら）身体を動かしてはいない。そこで自己身体の運動を、後から振り返って反省することの困難さが、さまざまに推定される。

この問題群については、反省することの限界と、いわゆる意識を伴わない身体運動の特異性という二つに区分することができる。前者はフッサールの時間論に、後者はフッサールの身体論に直接関わっている。この課題はこの両方にまたがった問題群といえるが、本研究は特にフッサールの時間論についての分析を踏まえた上で、そのいわば無自覚的な身体運動について分析を試みた。

それによって反省をとおして、自分の身体運動を理解し、それを記述することには二つの困難を横たわっており、まず反省自身が、身体運動を遂行している自我には届かないということである。さらにはまた身体運動をなしているときには、身体自身が知覚の対象にはなっていないということである。それゆえたとえ反省して後から振りかって見たとしても、運動中の身体を把握するということには至らない。

しかし身体運動はいちいち反省しなくともなされており、反省を介してそれを制御するものでもない。その動きにいわば磨きをかけるには、動きの中からその感触を確かめていくことが、最終的なよりどころとなってくるのである。

（４）また身体に関わる現代の論説および応用倫理問題にも着目し、身体の所有（権）の問題から、派生する形でパターナリズムを課題とした。パターナリズムとは父権的温情主義とも訳されるが、（対象が大人であれ子どもであれ）「本人のことを思って」善意に基づいて干渉することである。子どもに対してパターナリズム的態度で接することは、自明であるように思われる。しかし、現実社会を支えている最も重要な価値観としては自由主義が挙げられるが、この自由主義はパターナリズムとは対立していると考えられる。さらにまた「子どもの権利条約」が日本でも 1994 年に公布され、これにより子どもを保護の対象から主体的な自己として（も）認めることとなった。

以上のような現状のなかで、大人になりつつある子どもに対して、パターナリズム的態度に基づいて自由主義を説明し、さらに自由についてリアリティを感じさせるにはさまざまな困難がつきまとう。子どもに対するパターナリズムと自由主義の対立点を明らかにした上で、子どもに対するパターナリズムを正当化する論述を批判的に吟味した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①鈴木康文「フッサール現象学における実在性---物・身体・心」、『倫理学』（筑波大学倫理学研究会）第 28 号、2012 年、pp.27-38、査読有。

②鈴木康文「書評：三宅浩史『三木清『哲学入門』パラフレーズ』風詠社」、『北陸宗教文化』（北陸宗教文化学会）第 24 号、2011 年、pp.107-110、査読無。

③鈴木康文「自己接触現象の固有性の発見---フッサール身体論における二重感覚」、『北陸宗教文化』（北陸宗教文化学会）第 23 号、2010 年、pp.1-18、査読有。

〔学会発表〕（計３件）

①鈴木康文「チャイルド・パターナリズムと自由主義」、北陸宗教文化学会第 20 回大会、2013 年 10 月 19 日、金沢大学サテライトプラザ。
②鈴木康文「振るまいと気づき：フッサール現象学を手がかりとして」、北陸宗教文化学会第 19 回大会、2012 年 7 月 7 日、金沢教育会館。
③鈴木康文「フッサール現象学と心身二元論」、比較思想学会北陸支部第 21 回大会、2010 年 12 月 4 日、金沢 IT ビジネスプラザ武蔵。

〔図書〕（計２件）
①竹村喜一郎、合澤清、滝口清栄編集、鈴木康文他『ドイツ思想の展開とその位相』（社会評論社）、2014 年（刊行予定）、査読有。
②河上正秀、小林秀樹編集、鈴木康文他『変容する社会と人間』（北樹出版）、2014 年、pp.1-220(pp.114-134 担当)、査読有。

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1) 研究代表者
鈴木　康文（SUZUKI, Kobun）
石川工業高等専門学校・その他の部局等・教授
研究者番号：50302336